Steel Landscape 鉄の点景

花火に鉄が使われていることをご存じだろうか。多種多様な炎の芸術を演出するために、花火にはさまざまな金属が用いられるが、鉄粉はおもに火花を出すために使われる。含有炭素量によって火花の形がさまざまに異なるとされ、なじみの深いところでは、玩具花火などにも頻用されている。花火のうちでもとくに大量の鉄粉を使用するのが、今回とりあげる手筒花火といわれるもので、おもに祭礼で使われる。吹き上げる火の粉は、若者に洗礼をあたえ、日神を導くものとされているようだ。今回は手筒の醍醐味とそれをつくる花火師の技に注目してみたい。

諏訪神社の手筒花火。

祭りを彩る鉄

手筒花火

吹きあがる火花は銑鉄の粉

静岡県浜松市からほど近い浜名湖畔の町。ここ遠州新居では毎年七月下旬に「海道の奇祭」として知られる諏訪神社の奉納花火が行われる。独特の花火を用いた神事の中でも、主役といえるのが、手筒花火である。孟宗竹に畳表と藁縄を巻き付けた手筒を大勢の男たちががっしりと脇にかかえ、その先から猛烈な勢いで火の粉を吹き上げる。火の粉は柱となったのち、頭上に降り注ぎ、その髪と背を焦がす。数千におよぶ火柱のただなかを、男たちは法螺貝や太鼓に合わせて気勢をあげ乱舞し神がかりになっていく。

この手筒から吹き上がる火の粉の正体が、実は鉄粉だという。もちろん鉄だけで燃えあがるわけではない。火薬に鉄粉を混ぜることで鉄がいっしょに燃えて火花となるのである。花火師たちが使う鉄粉とは、鋳物用銑鉄を細かく粉砕したものである。炭素の多い銑鉄のほうが、明るく強い火花になるのだという。

筒の本体は、直径10㎝、長さ60㎝ほどの3～4年ものの竹が使われる。このくらいの竹を灰汁で煮て油ぬきをしたあと日陰干しすると、繊維がしまって強くなる。吹かせ口にするフシに穴をあけて残し、それ以外はフシ抜きをする。ここへ硝石と硫黄と炭を混ぜた黒色火薬と、鉄粉を混合して長い棒を使って堅くぎゅうぎゅうにつめこんでいく。このブレンドによって、梨肌に似た独特の炎が生じるところから、手筒に使われるこの

火薬を梨粉（なしこ）と呼ぶ。つめかたが甘ければ事故につながる。填薬（ていやく）密度が低い場合は巨大な爆竹になってしまうのだ。上からゆっくりと燃え、勢いよく吹き上げるようにつめなければならない。そのためにはスキマをつくらないことが肝要となる。

反応性の高い硝石と鉄を一緒に入れ、しかも水も含ませているため、つめたあと長い時間は置けない。鉄が酸化して使い物にならなくなってしまうのだ。そのため手筒花火はすべて祭りの前日につめられる。

火の色や勢いをよくするためには、さまざまな工夫が凝らされる。つめ具合によっても、微妙な違いが出る。鉄は「華を咲かせる」ために重要な要素になるのだという。花火師にいわせると、鉄によって華の咲きかたが違うという。――もっと炭素の多いものを使ってみたら、粒の大きさを変えてみたら、と、伝統を基本としながらも新たな工夫が重ねられる。ほんの数分の華のために、ときには夜を徹して火薬をつめる作業が行われるという。

鉄砲組の伝統から生まれた神事の炎

新居の手筒花火は、江戸時代中期に吉田（豊橋市）の祭礼花火を受け継いだものだといわれる。手筒花火は新居、豊橋、豊川、岡崎と、東海道沿いの町や村に伝わっており、打ち上げや仕掛けなどの日本の花火の源流も、この近辺から起こってきたと見られる向きがある。手筒花火のもともとの起源については諸説あるようだが、三河を中心に手筒をはじめとする花火の伝統が生まれていったのは、江戸時代を通じて幕府の火術・砲術の中心地であったことと関係が深いと考えられているようだ。

徳川家康がかかえた鉄砲組は、所縁（ゆかり）の地である松平村（現・豊田市）出身者を中心に三河の男たちで構成されていた。火薬の知識をもった職人たちの集団がそこにいたわけで、彼らによって、手筒をはじめ三河の花火の伝統が築かれていったと見ることができるという。花火の祭礼は大量の火薬を使用するため、地元の大名などから、しばしば中止命令が出されたこともあったというが、めげずに続けてこられた背景には、将軍家の鉄砲組という御旗があったことも関与しているだろう。

手筒花火に使われる代表的鋳物用銑鉄の成分分析値
：（社）日本煙火協会提供

C	3.35％
Si	0.45％
Mn	0.67％
P	0.089％
S	0.021％

手筒に火薬をつめる様子は、たしかに火縄銃をこめる姿にそっくりといっていい。ただ違うのは、手筒は発射口からではなく底の側からつめていく点である。口を下にして棒で叩きつめ、最後に粘土で底蓋がつけられる。

祭りの夜、男たちは手筒を点火した後、巧みに抱きかかえて火柱を上へ向ける。吹き出し口は頬の横10㎝に位置し、炎は10m近くまであがる。

炎の勢いに萎縮することは許されない。降り注ぐ火の粉の洗礼を受けることが、男児としての一人前の証しになるのだという。手筒花火は、この地方の男にとっては、通過儀礼にもなっているということだろうか。あるいは厄年の壮年が持てば、厄おとしの意味をもつという。

新居からさらに東海道を下った豊川では、各村々や神社ごとに伝わってきた手筒花火の祭礼をまとめて「豊川手筒まつり」として毎年催している。こちらも勇壮な手筒を見ることのできる代表的な祭りのひとつである。

祭礼の多くは神事を写していることが多いが、新居では猿田彦に扮した人物が登場し、男たちが技を競い合う中を乱舞して歩くという。猿田彦は鼻が長く赤いほおずきのような目をもち、しばしば神々の案内役をはたすが、その外見から天狗とも同一視されることがある異形の神である。奉納花火の祭礼では、猿田彦が岩戸ごもりから出てきた天照大神（あまてらすおおみかみ）を松明（たいまつ）を掲げて先導した古事を再現しているという。手筒から吹き出す鉄の火の粉は、猿田彦の松明を模しているというわけだ。

諏訪神社の祭礼では、闇がおおってしまった世界にふたたび日神が顔を出す時、それを松明の炎が導いていくというドラマが演じられていることになる。少し強引な比喩ではあるが、手筒からあがる鉄の火の粉が太陽の光を導いたように、重く低迷する世相の中で、鉄鋼という松明が新たな時代の光を先導することはできはしないものだろうか。ふと、そんな感慨にとらわれた。

［取材協力：（社）日本煙火協会、三遠煙火㈱
写真提供：新居町産業振興課］

手筒花火の火薬づめ作業。

代表的な手筒花火の祭礼

●諏訪神社の奉納花火／
静岡県浜名群新居町
7月下旬の金土曜日
問い合わせ先：新居町産業振興課
05359-4-1111

●豊川手筒まつり／愛知県豊川市
8月第3週か第4週の金土曜日
問い合わせ先：豊川市役所商工課
05338-9-2140